

THE YOUNG PERSON'S GUIDE TO THE ORCHESTRA B. Britten

PART 1: 11' 24"

PART 2: 7' 22"

André Previn
London Symphony Orchestra

制作にあたって

DAMオリジナル・オーディオ・チェック・レコードも、DAM会員の皆様に支えられて、回を重ねる毎に新しい企画を試みてまいりました。今回は昨年12月4日、63歳で世を去った、イギリスの作曲家ベンジャミン・ブリトウンの「青少年のための管弦楽入門」をアンドレ・プレヴィン指揮ロンドン交響楽団の演奏でおおくりします。このレコードは東芝EMI(株)から、プロコフィエフの「ピーターと狼」と一枚にカップリングされて発売されていますが、オーディオ・マニアの間では録音のとびきり良いレコードとして知られているものです。既に市販盤を知っていらっしゃる方は、このDAM45回転盤を聴かれて、「オヤ？」と思われるに違いありません。そう、プレヴィン氏のナレーションが入っていないのです！この曲は、ナレーションを入れても、入れなくても良いことになっているのですが、今回は東芝EMI(株)の御好意により、まだ市販されたことのない、ナレーション抜きのマスター・テープ(よりフレッシュなサウンドということになります)で制作できることになりました。

とにかく、オーケストラの楽器が次から次へと紹介され、最初と最後にオーケストラ全部の総奏があるなど、オーディオ・チェック・レコードとしても大変便利にできています。更に、大編成のオーケストラの音が、極めて透明で、かつダイナミックに録音されていて、特に低音の雄大な響きは驚異的ともいえるほどで、カートリッジやアームばかりではなく、今流行のフロア型スピーカーのテストにも絶好です。

この東芝EMI(株)の名録音をより忠実に再現するために、45回転30cmレコードとしては多分他に類がないマスター・プレスを採用することになりました。

カット後の複雑なメッキ行程を大幅に省略したマスター・プレスはその良さの反面、製造段階で非常に手間がかかるものであり、東芝EMI(株)には多大な御協力をいただきましたことを心から感謝いたします。

最後に、このDAMの自信作を末永く御愛聴いただければ幸いです。また、DAMといたしましては、今後も会員の皆様と共に、オーディオの飽くなき探究をおこなって行く所存でございますので、よろしく御支援のほどお願い申し上げます。

DAM推進委員会

青少年のための管弦楽入門

B.ブリトウン

アンドレ・プレヴィン指揮
ロンドン交響楽団

DOR-0037
STEREO
45RPM



DAM

プレヴィンの過去、現在、そして……

現在のプレヴィンの活躍ぶりは、まさに驚異的といつていいほど多彩である。彼はロンドン交響楽団の首席指揮者であると同時に、ロンドンの“サウス・バンク・サマー・フェスティバル”の音楽監督も務めている。そしてギルドフォード音楽院の教壇では、後進の育成に精を出し、BBC・テレビでは、バーンスタインばりのワンマン・プログラムを持っている。この番組はプレヴィン自身がスクリプトを書き、自分でしゃべり指揮し、かつびくという、完全な彼自身のショーである。おかげでクラシックには縁遠かったヤングたちにも、恰好の啓蒙番組として親しまれているようだ。このレコードでいえば、ブリトウンの「管弦楽入門」が、テレビのプレヴィンを知る恰好のキーになるだろう。ここでは彼が、自身でナレーションを受け持つ、きめの細かな解説をきかせてくれる。ミア夫人のように専門の俳優ではないので、プレヴィンの語りは決してうまくはないけれど、ことば少なに要点をついた簡潔な解説は、オーケストラを知りつくした専門家ならではのものである。

プレヴィンが着任したおかげで、ロンドン響のコンサートのチケットは、飛躍的に売り上げをのばしているというし、そのきき手の大半は今までクラシックの演奏会には縁の遠かった、若者たちであることは注目される。これはかつての彼が、ポップ畑のミュージシャンだったことと、深い関係がありそうだ。プレヴィン自身がいうように、彼らは「自分たちのサイドから音楽を考えたり見たりできる指揮者」という親しみを持っているからにはほかならない。プレヴィンはアメリカで音楽教育を受け、トッホとかカステルヌオヴォ＝テデスコなどの巨匠の教えを受けて育ったが、彼が最初に職を得たのは、MGM映画の作編者としてであった。しかも初期に手がけた作品のほとんどは、B級映画ばかりで、タイトル・バックを必死になってらんでいても、一瞬のうちに名前が消えてしまうような頼りない存在だった。

だがこのうだつのあがらないシネマ・ミュージシャンも、妙なところで名前を上げる結果になった。道楽で友人のジュリー・マン(ドラムス)、ルイ・ヴィネガー(ベース)たちと録音したジャズLPが、爆発的なヒットになったのである。殊にミュージカル「マイフェアレディ」をジャズしたLPは、ジャズ史上第2を記録する大ベストセラーになった。こうしてジ

ャズ・ピアニストとして、プレヴィンは世界的な大スターになってしまった。そのうちに専門の映画の方でも認められはじめ、「恋の手ほどき」「ポーギーとベス」「あなただけ今晚は」では、たてつづけにアカデミー映画音楽賞を受賞した。

その彼が突然、こともあろうに交響楽団の指揮者に、見事な変身をなしてげたのである。たいていの指揮者はふつう音楽学校を出ると、コンサートホールへとまっすぐに進んで行く。ということは一般の若者とは、何の接触を持つ支点もないということだ。つまりポピュラー音楽やロック・ジャズを好む若者にとって、こういった指揮者は縁もゆかりもない異次元の人になってしまう。だがプレヴィンは、このような古いタイプの指揮者ではない。彼は映画のスタジオ編曲者として、管弦楽法を実地の現場で、理くつではなく体で勉強してきたのである。またジャズ・ピアニストの経験から、音楽のいちばん大切な要素はリズムだということも十分に知りつくしている。

だからプレヴィンの音楽へのアプローチは、常にフレッシュでビューティフルである。彼はベートーヴェンの「運命」から、「伝統」という名のアカを完全に洗い落してくれたし、ラフマニノフの交響曲を最高に美しい表現できかせてくれた。そこにはどんな既成観念もなく、ナイーブな現代の感覚と音楽へのロマンティックなラヴがみちみちあふれている。

昔からクラシック畑からポップ畑へ転じて、成功をかちえた指揮者は少ない。アンドレ・コステラネッツやアーサー・フィードラー、フランク・ブルセルなどは、その最高のスターだが、生粋のポップ畑からクラシックへ挑戦して、見事な成功をおさめたのは、指揮者ではプレヴィンが最初だろう。少なくともポップのファンを、コンサートホールにまで連れ込んだ功績は、プレヴィンのパーソナリティの最上の一面をあきらかにしている。したがって彼の音楽には、いわゆる悪い意味の「なれ」がない。ベートーヴェンの「運命」は、大部分の指揮者にとっては振りなれた名曲で古典だが、プレヴィンにはラフマニノフやヴォーン＝ウィリアムスの交響曲と余り大きなちがいはない。彼はラフマニノフに対するのと同様に、ベートーヴェンにも新鮮な感動を持つことができる。クラシック指揮者としては、新参者であることの特権を彼は最大限に生かしているといっても良い。たしかにプレヴィンはマエストロとしては、大多数の若いファンと同様、彼自身も「ヤング・アッ

ト・ハート”なのである。今彼のたどった足跡をふり返ってみると、映画音楽編曲指揮者、ジャズ・ピアニスト、最初の夫人ベティ・ベネットを盛り立ててのジャズ・アレンジャー、前夫人ドリーの作詞につけた「ライク・ヤング」「グッドバイ・チャーリー」などにみられる、ソング・ライターの仕事、そしてクラシックのピアニスト、指揮者、テレビの音楽番組のホストと、着々とレパートリーを広げてきた。今のプレヴィンは、おもしろさめぬロンドン楽壇の中心人物だが、はたして彼の未来には何が待ちうけているのだろうか。きくところによると、近い将来彼はオペラの指揮者としてもデビューするといわれている。また最近ジョン・ウィリアムスに捧げた、ギター協奏曲でもうかがえるように、作曲の方面でも意欲をみせはじめた。そしてミア夫人と組んでこのレコードや、オネゲルのオラトリオのような劇音楽へも展望が開けはじめた。どうやらプレヴィンは、10年先輩のバーンスタインのあとを着実に追いはじめたような気がする。

出谷 啓

ロンドン交響楽団 (London Symphony Orchestra)

ロンドン交響楽団は1904年、当時の大指揮者ハンス・リヒターを中心に結成された。この楽団は楽員の自主運営によって動いており、その結果、演奏会、レコーディング等は極めて計画的・意欲的で、芸術水準の高さを維持している。1968年の定期演奏会「インターナショナル・シリーズ」でもイギリス最高との評価を得、自主独立性を守ることと有名指揮者を招いて公演するという基本的な考え方は変わらず、これまでも、自国のピーチャム、バルビローリ、ポルト等をはじめ、フルトヴェングラー、ワインガルトナー、ワルター、メンゲルベルク、ショルティ、オーマンディ、バーンスタイン、ブーレーズ等が招かれている。

第2次大戦後は、ヨーゼフ・クリップス、ピエール・モントゥ等を経て1968年以来アンドレ・プレヴィンが常任となり、特に若い世代の間に絶大な人気を博している。

ベンジャミン・ブリトウンの死

1976年12月4日イギリス、オールドバラの自宅で心臓病のために永眠63歳。

ブリトウンは1913年11月22日サフォーク州ローストフト生れで、父は歯科医、母はソプラノ歌

手でとくに母親より音楽的な才能を受けつき7歳で作曲をはじめ9歳の時にはなんと弦楽四重奏曲を作曲した。そのころから音楽的才能が出てき、12歳の頃より本格的にフランク・ブリッジ師につき作曲を学び、ピアノもハロルド・サミュエル師に学んだ。16歳になりロンドン王立音楽大学に入学し作曲をアイランド、ピアノをベンジャミンに師事した。

1945年発表した「ピーター・グライムス」で世界的に有名になった。またピアニストとしても大活躍し代表作は「シンプル・シンフォニー」「戦争レクイエム」「キャロルの祭典」「青少年のための管弦楽入門」でエリザベス女王はプリトゥンの音楽的功勞に対し貴族の称号を与えた。

ブリトゥン：青少年のための管弦楽入門

作曲年代：1945年

副題に「パーセルの主題による変奏曲とフーガ」と記されているように、イギリスのバロック時代の作曲家、ヘンリー・パーセル（1659-1695）の劇音楽「アプテラザール」の組曲第2曲「ロンドン」が、主要主題として使われている。元来は教育映画「オーケストラの楽器」のサウンド・トラックとして書かれたが、今日ではブリトゥンのもっともポピュラーな名曲として親しまれている。

この曲のスコアをみると、各部分の最後はフェルマータで音をのばすように工夫されていて、この間に解説を入れても差し支えないようにできている。したがって解説入りの場合は、「青少年のための管弦楽入門」、また解説ぬきでつづけて演奏された場合は、「パーセルの主題による変奏曲とフーガ」になるといってもいいだろう。なお解説を入れるときの台本は、エリック・クロツィアーの執筆によるものが使われる。

曲はまず全管弦楽により、パーセルの主題が堂々とひびきわたる。13小節の提示ののち、6つの変奏がくりひろげられる。第1変奏は、木管楽器の合奏で目まぐるしい小変奏である。レントに落ちつき金管楽器の登場で、ホルン、トランペット、トロンボーンのトゥッティ。弦楽器はモダラートで、弦楽五部合奏に4小節おきてハーブがアルペジオでからみつく。打楽器はティンパニが主題をたたき、シンバル、トライアングル、タンブリン、小太鼓が装飾を加える。ふたたび全管弦楽が主題を盛り上げて、提示部分の終りを告げる。

変奏部は各楽器にスポットをあてて、個人的にくりひろげられる。登場順にあげると、①フルートとピッコロ、②オーボエ、③クラリネット、④バスーン、⑤ヴァイオリン、⑥ヴィオラ、⑦チェロ、⑧コントラバス、⑨ハーブ、⑩ホルン、⑪トランペット、⑫トロンボーンとバス・チューバ、⑬ティンパニ、⑭大太鼓とシンバル、⑮タンブリンとトライアングル、⑯小太鼓と木琴、⑰カスタネットとドラ、⑱ムチと全打楽器という風につづく。

そしてフィナーレのフーガでは、新しいブリトゥン自身の主題がピッコロを先導に、木管弦ときめの細かな展開がきかれるが、金管がパーセルの主題をりょうりょうと吹きならして、フーガにおおいかぶさって壮大なクライマックスを築き上げるのである。

出谷 啓

★ ★ ★
 [本レコードの場合頭にナレーションが入っていませんが、対訳から日本語を取り出して音楽を聴くうえで便利な様にタイミングを入れてあります。]

SIDE 1

0.00 (分秒)

作曲家ベンジャミン・プリトゥンは、次のように記しています。この音楽作品は、特に若い人々にオーケストラの楽器について知って頂きたかったので書きました、と。オーケストラの中には、4つの演奏者のチームがあります。即ち弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器の4つです。これら4つのチームがそれぞれ使っている楽器には、一家族のような類似点を持っています。例えば、弦楽器は弓をもって演奏したり、或いはまた、指ではじいたりします。木管楽器や、そして金管楽器は吹き鳴らしますし、打楽器は打ちます。それでは、イギリスの大作作曲家ヘンリー・パーセルのテーマを、まずオーケストラ全体の合奏で、そのあと、4つのグループの楽器のそれぞれで演奏するのを聴いて頂きましょう。

0.34

最初に出てきたのは木管楽器、これは木で作られています。

1.02

初期の金管楽器は、トランペットと狩猟用のラッパでした。これらは金管楽器の近代的な後裔といえます。

1.32

次は弦楽器です。これは大きいのも小さいのも、弓をもって弾くか、さもなければ指ではじきます。ハーブはいつも指ではじきます。

1.59

打楽器のグループには、ドラム(太鼓)ゴング(銅羅)タンブリン、そのほかの叩く楽器が含まれます。

2.16

皆さんがこれらの楽器をお聴きになった後、オーケストラは再びメロディーを演奏します。

2.47 (この部分にバンドが入っています)

では、それぞれの楽器がそれぞれ自身の演奏するのを聴きましょう。木管楽器のチームで一番高い音を出し、明るく澄んで甘い声を持っているのは、フルートです。かん高い声の、小さい弟は、ピッコロです。

3.20

オーボエはやさしくて物悲しい性質をもっています。しかし作曲家が要求するならば、オーボエは十分に激しく力強さを表わすことができます。

4.23

クラリネットの音色は非常に軽快です。美しくなめらかで柔らかなひびきをもたらします。

5.07

バスーン(ファゴット)は、木管楽器チームの中では一番大きな楽器です。従ってバスーンは一番深い音色をもっています。

6.10

弦楽器の家族の中で一番高い声の持主は、ヴァイ

オリンです。ヴァイオリンは、2つのグループ——第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンに分かれて演奏されます。

6.50

ヴィオラはヴァイオリンよりほんの少し大きめです。従って音色もヴァイオリンより深くなります。

8.04

チェロは、このように輝やかしい豊かさとおたかかさをもって歌います。

9.22

コントラバス(ダブルバス)は弦楽器一家のおじいさんです。重くてぶつぶつ不平を鳴らすような声をもっています。

10.30

ハーブは47本の弦と、弦の調子を高めるために7つのペダルを持っています。

SIDE 2

0.00 (分秒)

金管楽器の一家はホルンで始まります。これらの楽器は円形にぐるぐるまいた真鍮のチューブから作られています。

0.56

トランペットのひびきはどなたもよく御承知ですね。

1.29

トロンボーンは、重くて厚くよく響く声をもっています。バス・チューバは、もっと重たい音色を出します。

2.36

打楽器には非常にたくさんの種類がありますが、ここにあるのはみなさんのよく知っているものばかりです。まず最初にあげられるのはケトル・ドラムで、ティンパニとも呼ばれています。

2.54

大太鼓とシンバル

3.06

タンブリンとトライアングル

3.17

小太鼓とチャイニーズ・ブロック

3.28

木琴(シロフォン)

3.39

カスタネットとゴング(銅羅)

3.52

そしてみんな揃って演奏するテーマを聴く前に、鞭の音がはいります。

4.39

さて私共は、オーケストラの1つ1つの楽器の演奏をききました。今度はそれを土台にしたフーガ(運走曲)と一緒にきくことにしましょう。楽器は前と同じ順序で、次から次からあらわれます。—ピッコロに始まって、おしまいに金管楽器がヘンリー・パーセルの美しい旋律を演奏しますと、ほかの楽器は、ベンジャミン・プリトゥンのフーガを演奏します。

訳：鈴木松子

マスター・プレスについて

マスター・プレスのことにふれる前に、まず一般のレコードの製造工程の説明から始めましょう。

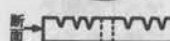
①マスター・テープ

全てのレコード(ただしダイレクトカッティング盤は除く)の音源は、この様なテープに収録されて録音スタジオから、カッティング工程におくられます。このレコードの場合は、マスター・テープの状態でイギリスのEMI本社から東芝EMI(株)に送られてきたわけです。なお、このマスター・テープの規格は一般に、オインチ、2トラックで、テープ・スピードは38cm/sec又は76cm/secとなっています。



②ラッカー・マスター

ラッカー盤は、アルミの円盤に硝化綿を塗布したもので、その表面はとても柔らかです。これにマスター・テープの音がかッティング・マシンによって溝と溝と刻み込まれます。



顕微鏡による溝検査(隣りの溝との接触、溝の途切、溝幅や深さのチェック等)終了後、次の工程に進みます。

銀鏡処理

ニッケル・メッキ

はく離

③メタル・マスター

ラッカー盤にメッキ処理をして、それをはがすと凸型(メタル・マスター)ができます。このメタル・マスターで直接プレスすることを、マスター・プレスというわけです。



メッキ処理

はく離

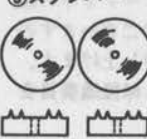
④マザー

メタル・マスターに再度メッキ処理をして、はく離すると、マザーができます。これはラッカー盤と同じ凹型ですが、ラッカー盤と違い、金属性なのでカートリッジで検聴することができます。



⑤スタンパー

マザーにメッキ処理をして、はく離するとスタンパーとなります。スタンパーは一枚のマザーから複数枚数の製造が可能であり、レコードのプレス枚数に





に応じて、スタンパーが作製されることとなります。

スタンパーがプレス機にかけられ、レコードが大量に生産されます。これで、レコードが完成!

以上が、通常のレコードの製作工程ですがおわかりいただけましたでしょうか。

マスター・プレスとは、以上の工程のうち④と⑤を省略して、いきなり⑥のレコードをプレスすることをいいます。

何故、このようなことをするのかといいますと、マスター・テープから直接カッティングされた、ラッカー盤が、極めてナチュラルで素晴らしい音質をもっているため、これを損うことなく、レコードにするべく、複製の工程を少くするのです。

写真の複製で、輪郭がぼけたり、テープをダビングするとS/Nが悪化して鮮度が落ちると同じように、高度な技術をもってしても、レコードの工程で複製をくり返すたびに、微妙な音の差を生じてくるのは、止むを得ないことといえます。

そこでこのような、マスター・プレスをとりあげたのですが、マスター・プレスにも欠点があります。それは極めてコストがかかり、又、大量生産がきかないということです。なにしろ、1枚のメタル・マスターでプレスできる限度は、1,000枚内外とされています。今回DAMのマスター・プレスでは、安全を見込んで1枚のメタル・マスターからのプレスは500枚前後といたしました。ですから両面あわせて数10枚のラッカー盤をカッティングする必要があるわけで、おのずと製造コストも大幅にupすることになります。

今回、DAMがあえてこのマスター・プレスを採用したのは、プリトンの「青少年のための管弦楽入門」のマスター・テープの音が、“凄い”の一語につきため、それを極力損わずに本盤レコードにして会員の皆様にお聴きいただきたいからに他なりません。

45回転30cmレコードとしては、恐らく世界初のマスター・プレスといえるでしょうし、盤質についても東芝EMI(株)の誇る「プロ・ユース材」を使用し、名実ともに最高品質のレコードをお届けできることになりました。

皆様の装置でじっくり御試聴のうえ、御感想をお寄せいただければ幸いです。

(M.W)

オリジナル・マスターテープによる45回転 ハイレベル・カッティング・レコードについて

一般に音楽再生に一番必要な条件とは何だと思われるでしょうか。ファンダメンタル・ハーモニックスの忠実性でもなければパルシブなりアル・サウンドでもないのです。そうです、それは“静けさ”ではないでしょうか。即ち、ダイナミック・レンジの必要性ではないかと思えます。皆さんは、あのコンサート・ホールでの音響効果を、又その雰囲気をもとめて自分のリスニング・ルームで再現したい——床を通して体を震わせるほどのコンパスのうなり、耳を圧するダイナミックなティンパニー打音、直接音と間接音の対比がシャープなブラスの響き、繊細なしかも豊かな弦楽器のハーモニックス・トーン、——いずれもが忘れ得ない感激として是非とも音響再生したいサウンドである事はこのレコードを聞かれる皆さんは一層の欲求をお持ちの事と思えます。

この様な欲求不満は先ず録音系、再生系に於けるダイナミック・レンジを拡げる事が基本的な問題となります。実際の例として例えば録音時のマイク・アレンジをとってもS/Nを上げる為に余りオン・マイク過ぎると、ファンダメンタル・トーンとハーモニックス・トーンとのバランスがくずれ音楽にならなかつたり又、オフ・マイク過ぎれば、ホールその他の暗騒音が問題になったりセパレーションが悪くなつたりで、しかも現在の磁気録音(アナログ信号)系の限界が最近では特に問題視され始め、更にはディスク・レコード化する事での製造プロセス、材質の問題をかかえているのが現状と思われまふ。しかしこの様な対策として更にいろいろなソフトウェアが考えられ導入されております。例えばPCMレコード、ダイレクト・カッティング・レコード、76cm倍速録音、ハーフ・カッティング、ダイレクト・プリント・レコード……等いずれもディスク・レコードのダイナミック・レンジはもちろんの事高級音質化をねらったテクニックであり、いかにして音楽性価値の高いよりオリジナル演奏に忠実な音響バランスを再現するか、きびしい音楽的制約内で採用している訳です。

そこで好評だったケンベ/ドレスデンorch. “アルプスSym”カラヤン/ベルリン・フィル“タンホイザー”に続いて、プレヴィン/ロンドン交響楽団/青少年のための管弦楽入門を45rpm盤する事で線速度が33rpm盤より1.35倍速くなる為に歪、Fレンジ、Dレンジ等の物理的条件が全て優位になるメリットを生かしここにディスク化致しました。

きっとこのレコードを聴かれた方はより高いオリティティとオリジナル同様のリアル・サウンドが楽しめていただけると確信しております。更に完成された音楽性と私共のレコード・ディスクの限界に挑戦した意気込みも理解していただけると思います。

①EMIオリジナル・マスター・テープを使用。
EMI録音スタッフの優秀な録音をほこるオリジナル・マスターよりカッティングされている。

②カッティング・システムはダイレクト・カッティングに使ったノイマン・カッティング・システムを使用。

Tape Recorder Studer A-80vu/II

(カッティング仕様)

Drive Amplifier Neumann SAL-74

Cutting La the Neumann VMS-70

Cutter Head Neumann SX-74

Cutting Engineer Y.Okazaki

Cutting Date Oct. 7~13, 1977

Neumann SX-74 Cutter Head については今さら申し上げる程の事では無いですが、特に過度特性、位相特性の優秀さに有る為にダイナミック・レンジの広い解像力とファンダメンタル・ハーモニックスの忠実性、又、直接音と間接音との分解能、ワイドなFレンジとダンピングの良さ等のトーン・キャラクターをもって、大管弦楽の迫力を充分に発揮出来たものと思えます。

③45rpmを採用。

カッティングに際してはもちろんリミッター・コンプレッサー等は使用しないで、45rpmのメリットを十分に生かしたカッティング・テクニックが採用されています。

a)カッティング・レベルは通常レコードより+5~+7dB高くレコード・ディスク再生限界をねらいました。(45rpm盤は33rpm盤より速度振幅(録音レベル)は1.8倍(5.2dB)の余裕がある)

b)重厚な低音を再生する為に充分な溝幅をとり、たっぷりとした送りピッチでカッティングされている。(内周では線速度の低下により高域の劣化、トレーシング歪(再生針の曲率半径に影響)現象があり、45rpmすることで線速度1.8倍になる為大変なメリットと云えます)

c)数種類のテスト・ラッカー音盤を作成し、音質についてはテスト・レコードにて充分なヒヤリングの上最終的に決定しました。

④レコード材質及び製造プロセスについては、東芝EMIプロフェッショナル・レコード仕様と同様な現時点最高の製盤技術を導入して品質の安定化を図っており、さらに今回はマスター・プレスを採用しております。

⑤尚このレコードはハイレベルでカッティングされている為、非常に鋭く、トレーシング時には針トビ、ヒリツキ、等でレコードを傷つけやすい切削状となっています。再生時には特にアームのラテラル・インサイド・フォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には十分に気を付けて下さい。

(東芝EMI(株)製造技術課 原清介)

RECORDED

Feb. 13 & 14, 1973, Abbey Road Studios

Producer Christopher Bishop

Recording Engineer Christopher Parker

●30センチ45回転レコードの取扱について

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱下さい。

(2)33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードより線速度が早いので、針先のトレース性は良くなりますが、カートリッジを含むトーンアームの慣性などで軽針圧の場合正確にトレースしないこともあります。歪みなどの恐れのある場合針圧を許し得るまで増して下さい。

(3)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転に比べて出やすくなります。レコードの保管、取扱いは充分注意して下さい。

●このレコードはカッティングレベルが一般のレコードに比べて大幅に高くなっておりますので、カートリッジアームの調整が悪いと歪や針飛びを起すことがありますので御注意下さい。
●再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますので室温を15°C~20°C位に保って下さい。

レコード材質——プロユース材使用

オーケストラの配置

